



能勢妙見山の参道。日蓮宗の寺院であるが、鳥居が参詣者を出迎える。さらに進むと道の両脇に神馬の銅像が並び、

兵庫県・大阪府 能勢電鉄

妙見線

文・渋谷申博

text by Nobuhiro SHIBUYA



連載 第8回

民営鉄道の 起源を訪ねて

鉄路は何を目指したか

北極星とサイダーと 北へ向かう路線と

能勢街道という道がある。大阪市北区中津あたりから能勢妙見山を結ぶ街道で、能勢妙見山や沿道の社寺への参詣者、三白三黒と呼ばれる能勢の名産品(米・寒天・高野豆腐・栗・炭・牛)を運ぶ運送人で賑わった道である。能勢電鉄妙見線はそれらの輸送を目的として、大正2(1913)年に開業した。当初は能勢口(現、川西能勢口)〜一の鳥居間の6・4kmであったが、大正12(1923)年には妙見(現、妙見口)まで延伸された。

私の能勢電鉄妙見線の旅は、まず能勢妙見山まで一気に登って参拝をすませてから、沿道の名所をめぐるつつ川西能勢口駅まで戻るルートをとることにした。

地図で見ると妙見線は兵庫県と大阪府の境をまっすぐ北に向かっているように見える。妙見とは北極星を神格化した妙見菩薩のことなので、名前にふさわしい路線ということになる。山岳に向かう路線なので実際にはそんなに簡単なものではなく、とくに開業直後は今以上に入り組んだ線形をしていた。当時は霊山らしい深い森が沿線に広がっていたのだろうが、今は終点の妙見口駅近くまで住宅地が続く。

しかし、妙見口からケーブルカーの駅に向かう道を歩いて行くと、「日本一の里山」と呼ばれる風景が広がってくる。山と田畑

